

保育士養成課程における「施設実習」の 課題と対応について (1)

～ 施設実習の「客観評価」と「自己評価」の比較検討～

笠井 友治郎

要 旨

この調査研究は施設実習指導の課題と対応を考える切り口として次の3点を考えた。

第一はまず施設の「客観評価」としての「実習評価」とその基になる領域項目からみえる課題を分析した。

次に第二は、学生の実習後の「自己評価」と施設の「実習評価」を比較することでみえてくる課題を調査した。個別指導の具体的なポイントの手がかりや根拠が明らかになってくる面があると考えからである。

また第三は短大2年間で実施される一連の実習課程の経過を「実習評価」の「推移」として捉え調査分析し、今後の実習指導の方向性について考察した。施設実習だけでなく実習全体に共通した課題があると考えからである。

この3点を主眼におき施設実習の今後の対応の方向性を考察した。

I はじめに

1 研究の目的

この調査研究の目的は施設実習指導における具体的な対応の方向性を探るため、施設実習における「実習評価」と学生の「自己評価」を比較照合し、「自己評価」から見える課題を明らかにすると共に、実習の「評価推移調査」から今後の実習指導の課題と対応を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究の概要

これまでの先行研究は、保育園や幼稚園とは違う初めての施設に対する不安の対応についての研究や施設実習体験の意味や意義とその内容についての研究などがある。子どもの権利や障害への認識、社会的養護の認識、学びの内容としての反省的思考や自己効力感の研究などの内容である。方法としてはアンケートによる事前事後調査研究や自己評価、及び自己評価と実習先評価の比較検討の研究などである。

今回の調査研究についての先行研究(中原2008)では、施設実習後の学生の「実習評価表」に基づき9項目の各項目間の相関関係などを調査した結果、「実習記録」に対する「自己評価」が高い反面、「施設評価」が低いという格差があることから、学生の「記録のとり方に」に対して「他者の視点」を意識させることが必要とある。今回の調査では更に施設と学生にどのようなズレがあるのかについて考察した。

今回のこの調査研究においては、施設の「実習評価」と学生の「自己評価」をつき合わせ4領域の項目で何が違い不足しているのか、そして今後の指導の方向性を見定めることが目的である。施設の「客観評価」の意味は大きく、また学生の「自己評価」のズレは学生の課題と必要な対応の方向性を示していると考ええる。

施設の「実習評価」は1日8時間、11日間、施設職員が学生と共に行動し学生の言動、係わり方、態度、対応を観察し評価した結果である。自分自身の施設職員の経験からもいえるのは実習担当者一人の判断で評価がなされるのではなく、必ず複数の職員の目によって実習評価はなされており、実習担当職員の主観ではない。評価としては十分に「客観評価」であり、学生の状態を正確に客観的視点で捉えているものと考ええる。従って受ける側としては施設の評価を適正に受け止め指導に生かすことが重要であると考ええる。

Ⅱ 調査内容と方法

1 施設実習における「実習評価」結果の調査について

(1) 調査対象

学生にとってはじめての施設実習・保育実習Ⅰ(施設)は2年生前期に実施される。その実習施設の学生に対する「実習評価」(客観評価)についてその分布状況を調べた。その対象学生は平成8年度2年生で「自己評価票」が記入された54名(平成28年度2年生85名中の64%)を対象とした。

なお、自己評価票の内容は5領域(細項目24項目)である。なお実習評価の4領域の内容と完全には一致しないものかなりの内容の重複しているものである。

(2) 調査内容と方法

- ① 施設評価としての「実習評価」の状況については、4段階A(優)、B(良)、C(可)、D(不可)評価の分布状況の調査である(表1)。
- ② また領域項目(4領域)の各評価段階(A B C D評価)の分布調査により、実習評価レベル毎のそれぞれの項目毎の課題について調査した(表1)。なお評価項目は1. 勤務態度 2. 子ども・入所者との関わり 3. 職員との関わり 4. 記録の作成についてという内容である。

(3) 結果と考察

① 実習評価Aレベルの特徴

実習評価Aレベルは20人(37%)であり全体の約4割であった。また3領域全般においてA評価が8割以上と高いが、4記録の作成だけが7割とややAが少ない状態でやや弱い面があることが窺える。

② 実習評価Bレベルの特徴

実習評価Bレベルは33人(61%)で6割である。領域評価レベルは、1勤務態度のみA評価が8割と高いが、そのたの3領域ではB評価が7,8割となっており、C評価が12~15%あり、4記録作成、5職員との関わり、2利用者との関わりの部分が低く、Bレベルの弱点・不足部分として考えられる。

③ 実習評価Cレベルの特徴

実習評価Cレベルは54人中1人(2%)で、データとしての人数が少ないので十分な言及はできない状況であるが、3領域でC評価であり全般的に課題を抱えていることが推測される。

(4) 要点と今後の課題

4領域の勤務態度はAB評価であり課題は少ないと考えるが、領域の2利用者との関わり、3職員との関わり、4記録作成はC評価が1~2割になっており課題があることが推測される。今回の対象者が2年生の64%なので全体の状況をより明らかにするためには今後は更に全体調査が必要と考える。

表1 施設実習における「実習評価」の状況

(学生54人)

領域項目 実習評価		1 勤務態度				2 利用者との関わり				3 職員との関わり				4 記録の作成				計			
レベル	人 (%)	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
A	20 (37)	20 (100)				17 (85)	3 (15)			16 (80)	4 (20)			14 (70)	6 (30)			67 (84)	13 (16)		
B	33 (61)	27 (82)	6 (28)			4 (12)	25 (76)	4 (12)		3 (9)	25 (76)	5 (15)		5 (15)	23 (70)	5 (15)		39 (30)	79 (60)	14 (10)	
C	1 (2)	1 (100)						1 (100)				1 (100)				1 (100)		1 (25)	0	3 (75)	
D	0 (0)																				
計	54 (100)	48 (89)	6 (11)			21 (39)	28 (52)	5 (9)		19 (35)	29 (54)	6 (11)		19 (35)	29 (54)	6 (11)		107 (50)	92 (42)	17 (8)	

2 学生の施設実習「自己評価」調査(1)

(1) 調査対象(平成28年度、2年生54名)

保育実習Ⅰ(施設)終了後の7月授業で自己評価調査票の記入をしたものを対象に調査。

(2) 調査内容と方法

「一致度」調査として施設の「実習評価」の4段階A B C Dレベル毎に学生の「自己評価」とその分布について調査。また施設の「実習評価」(客観評価)と学生の「自己評価」の「一致度」について調査した。(表2)

施設の「実習評価」は4段階(A B C D)であり、学生の「自己評価」は5段階で、特A大変よい、A良い、B普通、C悪い、D非常に悪いに区分(変換)されるが、どの程度一致度が見られるのかについて表2にまとめた。

(3) 結果と考察

施設評価(客観評価)Aレベル(20人)の学生の「自己評価」は特A(20%)A(75%)で合わせての評価の一致度は95%である。それに対して施設評価Bレベル(33人)の学生の自己評価のB評価の一致度は3人(9%)で約1割程度である。Bレベルの学生の9割が施設の客観評価より高い自己評価をする傾向があり、その中で特Aという高い自己評価をする学生の割合は15%である。

要約すると施設評価Aレベルの学生はBレベルの学生と比べ、比較をするとの的確で妥当な自己評価をしているといえる。それに対しBレベルの学生は高い自己評価をする傾向があることから、自己評価が甘く、客観評価とのズレがあると考えられる。Cレベルは人数

表2 「実習評価」に対する「自己評価」の一致度

自己評価 実習評価		自己評価の分布					一致度		
		人 (%)	特A	A	B	C	D	高	=
A	20 (100)	4 (20)	15 (75)	1 (5)			4 (20)	15 (75)	1 (5)
B	33 (100)	4 (15)	26 (76)	3 (9)			30 (91)	3 (9)	
C	1 (100)	1 (100)					1 (100)		
D	0								
計	54 (100)	9 (17)	41 (76)	4 (7)			35 (65)	18 (33)	1 (2)

が少ないので言及ができない面があるがやはり自己評価が高い傾向があると考えるが更に調査が必要である。

(4) 要点と今後の課題

今後の実習指導の方向性のポイントの一つは、一致度の結果からは客観評価が自己評価にフィードバックされ評価のズレが修正され適切な目標が具体的に設定されていく指導のプロセスが必要と考える。

3 学生の施設実習の「自己評価」調査 (2)

(1) 調査対象

前記の54名の学生に対する「自己評価票」の5領域(24項目)に対する調査をした。

(2) 調査内容と方法

施設の実習評価レベル(A B C)毎に自己評価5領域に対するB評価した人数に着目して調査した(表3)。その理由は学生の自己評価がC評価(悪い)、D評価(非常に悪い)がなくB評価(普通)が最低評価になっているためである。なお、5領域は1実習態度、2利用者との関わり、3職員との関わり、4施設理解、5学習活動であり、評価は5段階(特A大変よい、A良い、B普通、C悪い、D非常に悪い)の評価である。普通評価のB評価は学生にとって相対的に最低評価であり学生の弱点・不足部分を示していると考ええる。

(3) 結果と考察

- ① 施設の実習評価Aレベルの学生のB評価(弱点・不足部分)として、第一位は4施設理解であり、第二位は5学習活動である。それに対し実習評価Bレベルの学生では第一位は5学習活動、第二位は3職員との関わりである。全体をみても5領域の中では第一位が5学習活動で2, 3, 4領域はほぼ同程度である。1実習態度は5位で比較的安定して良好な部分と自己評価されている。
- ② 自己評価B評価の一人当たりの平均数は、施設の実習評価Aレベルが2.4、Bレベルが1.9であり、AレベルはBレベルよりも自己評価が厳しい面があることが窺える。

(4) 要点と今後の課題

全体的に自己評価では5領域の中で弱点・不足部分は5学習活動であるといえる。その内容(細項目)は、1職員への質問や報告、2日誌の提出と誤字・脱字の配慮、3客観的な観察と記録、4体験や指導の記述、5振り返りと考察、である。これら5点が学生の弱点・苦手不足部分と考えられるが、施設の実習評価で学生の課題と考えられた領域3職員との関わり、4記録作成とかなり一致している部分でもある。従って今後はこの5点について十分留意し事前事後の指導の必要性があると考ええる。

自己評価の弱点・不足部分は5学習活動の部分と考えるが、それに対する学生の評価にC評価(悪い)はみられず、B評価(普通)である。この点に客観評価と自己評価のずれ

表3 「自己評価」5領域のB評価（普通）の状況

※複数回答

自己評価領域 実習評価		1 実習態度	2 利用者との 関わり	3 職員との 関わり	4 施設理解	5 学習活動	B評価 人数 合計	平均 (1人当)
A	20人	8	9	8	12	11	48	2.4
B	33人	10	12	13	10	18	63	1.9
C	1人	0	1	0	0	1	2	2.0
D	0人	-	-	-	-	-	-	-
計	54人	18	22	21	22	30	113	2.0

表4 「自己評価」5領域のB評価の順位

実習評価 自己 評価順位	全体	Aレベル	Bレベル	Cレベル
1	5 学習活動	4 施設理解	5 学習活動	2 利用者との関わり 5 学習活動
2	2 利用者との関わり 4 施設理解	5 学習活動	3 職員との関わり	-
3	-	2 利用者との関わり	2 利用者との関わり	-
4	3 職員との関わり	1 実習態度 3 職員との関わり	1 実習態度 4 施設理解	-
5	1 実習態度	-	-	-

があり認識と修正が必要な部分である。

4 施設「実習評価」と「実習評価」全体の推移の調査 (3)

(1) 調査対象

施設の「実習評価」C評価(平成28年度2年生85人中7人)に対しての2年間で実施した「実習評価」(成績)の推移(通常5回)とその実習課題について調査した(表5)。

また1年生で初回の教育実習Iで「実習評価」C評価(85人中22人)について「実習評価」(成績)の推移を調査した(表6)。

(2) 調査方法と内容

- ① 施設実習C評価の7人に対し実習評価の推移を調査した(表5)
- ② また教育実習I C評価22人に対しての実習評価推移の調査(表6)については、1年生実習前期に第一回目として実施される教育実習Iとのつながりが考えられたことから、教育実習IでC評価を受けた22名に対して2年間の実習評価(成績)の推移を調査した。
- ③ なお実習C評価の回数の出現率(表7)は、実習評価(成績)の推移が第一回目の教育実習から始まって2年間で通常5回実施される実習経過の中で、その後C評価を何回受けるのか、その出現率について調査した。

(3) 結果と考察

- ① 施設の実習評価C評価(7人、8%)は、その後の実習のうち4人(57%)の人がC、D評価である。しかし実習を受けた人数に対する割合は80%であることから、かなりの確率で再度C評価となっている。すなわち施設評価C評価の学生の約6割が課題を抱え乗り越えることができないままC評価を繰り返すという状況が見られる。従って早い時期での対象者の把握と改善修正の対策が必要となる。
- ② また施設実習の指導の手がかりとして教育実習IのC評価の学生22人の実習推移状況を見ると施設実習では6人(27%)約3割が再度C評価となっている。施設実習から見るとC評価7人のうち6人(86%)であり、その対象を把握し弱点領域に対しての施設実習の事前指導をきめ細かく実施し修正していくことが求められると考える。
- ③ またC評価が繰り返されることが表7からもみられるが、教育実習22人(全体の26%)に対しては、C評価が1回は9人(41%)であるが、残り約6割はC評価を繰り返している。3回以上は7人(32%) 4~5回の合計は4人(18%)約2割となっており、割合としては少なくはないことから対象者に対しての指導が必要である。

(4) 要点と今後の課題

C評価、D評価が繰り返されることに対しては、毎回の実習に際し事前指導、事後指導、個別指導がその都度実施されているが、それにも係わらずこうした評価結果が生じるのだ

とすると、その学生の適性や目標の設定、進路の方向としての相談にも関係してくる。また実習評価の経過推移からは、初回の教育実習ⅠのC評価は、その後の実習のベースとして指導の手がかりになるのではないかという印象を受ける。今後の調査により更に明らかにしていくことが必要な部分でもあると考える。

表5 施設実習C評価の学生の「実習評価」の推移

実習 実習評価	1 教育実習 Ⅰ	2 保育実習 Ⅰ	3 保育実習 (施設)	4 保育実習 Ⅱ	5 保育実習 Ⅲ(施設)	6 教育実習 Ⅱ	計 (人)
A	1		-	1	1		3
B		6	-			1	7
C	6	1	(7)		3	3	20
D			-		1	1	2
計	7	7	7	1	5	5	32
C + D (再掲)	6	1	7	0	4	4	10
※1 C + D 出現率 (%)	86%	14%	(100%)	0%	57%	57%	
※2 C + D 出現率 (%)	-	-	-	-	80%	80%	

※1 保育実習(施設) C評価7人に対する出現率 (%)

※2 実習を受けた人数(5人)に対する出現率 (%)

表6 教育実習Ⅰ・C評価の「実習評価」の推移

	1 教育実習 Ⅰ	2 保育実習 Ⅰ	3 保育実習 Ⅰ(施設)	4 保育実習 Ⅱ	5 保育実習 Ⅲ(施設)	6 教育実習 Ⅱ
A	-	7	10	3	6	4
B	-	12	6	4	2	7
C	(22)	3	6	3	3	7
D	-				1	2
計(人)	22	22	22	10	12	20
C + D (再掲)	22	3	6	3	4	9
※C + D 出現率 (%)	100	14	27	14	18	40

表7 教育実習Ⅰ・C評価とその後の実習評価 C・D回数

回数 対象者	1回	2回	3回	4回	5回	計
C評価 22人	9人	6人	3人	3人	1人	22人
出現率(%) (22人中)	41%	27%	14%	14%	4%	100%

Ⅲ 考 察

- 1 施設の客観評価としての「実習評価」と「自己評価」を比較したが、実習評価C評価の学生に焦点を当ててみてきた面がある。C、D評価を受けた学生の課題の理解が指導のポイントと考えるからである。A評価(37%)の学生はAB評価でほぼ問題はなく、多少あったとしても修正していける力を持っていると考えられる。この点は今後更に確認が必要な部分であるが、自己反省的に見つめ点検する姿勢が比較的に見られるからである。B評価(61%)の学生の多くはAB評価で推移するが、その中でC評価を受ける学生が出てくるが、4領域項目でC評価を受けた12~15%程度がC評価の可能性のあるものとして想定される。全体85人とすると約10~13人位である。今回の調査は「自己調査票」が記入された者を対象としたために、C評価者数が少なくなっているが、施設実習の実施者全体では7人(8%)いることから、C評価の可能性のある特別な個別指導の必要な学生を合わせると総数は約20人(24%)程度と想定される。
- 2 今回の調査の課題としては、調査の総数が全体の64%なので、更に明確にするには今後は全体調査が必要である。また自己評価票の領域5項目に対して実習評価4領域と比較項目のずれがあることから、項目を一致させるなどによって「客観評価」と「自己評価」の十分な比較ができるようにすることが必要もある。個別指導のフィードバックがよりスムーズになされるためにも自己評価票の改訂も必要となる。
今後の課題のポイントをまとめると、1記録作の指導のあり方の検討、2実習評価CDレベルの学生とその可能性のある対象者への個別指導の内容及び体制の検討、3自己評価の認識のずれの修正のための自己評価票の改訂などがあげられる。
- 3 施設実習を経験することにより学生の認識は深まるが、そのためには中原(2007)のいう「周りから自らがどのように見られているかという『他者の視点』を意識させること」が必要になる。また事前指導と共に継続的にずれに対する指導も必要である。それは即ち学生に対する粘り強い個別指導が更に必要であるということでもある。
今後、更に達成感の得られる実習、失敗の少ない実習にするためには、事前指導のあ

り方や対象施設の選定とマッチング、そして施設実習の前に学んでおく必要性のあるカリキュラム内容の検討なども次の課題としてあげられる。

IV おわりに

- 1 かつて私が施設職員の時に施設実習を経験すると学生が成長すると学校教員から聞いたことがある。実習の前と後では意識や姿勢、考え方が違ってくるといふ。現在教員になり是非そうした有意義な体験を得て成長してもらいたいと思っている。

施設実習によって利用者や施設保育士の仕事に対する理解を深めるためには、更に体験を振り返り別な角度から捉えなおす機会が必要である。その一つとして「客観評価」と「自己評価」のズレを確認し修正しフィードバックするプロセスがやはり必要であると考ええる。

- 2 学生の課題、弱点に「記録の作成」や「自己評価」の甘さやずれがあることについては、これまでの実習指導に携わる教員の方々には経験的に十分了解されている部分と考える。

そうした「暗黙知」の部分を調査データで改めて一部分確認したということであるが、暗黙知は、できるだけ明確にし共通理解することで更に教職員チームとしてより明確なより良い支援が可能となると考える。指導については、ある程度共通の見方・視点、または基準となる「ものさし」があることで学生も教員も指導がスムーズなると考える。そうしたものの一つとして「自己評価票」を改訂しより適正なものにしていく必要性があると考ええる。

- 3 施設実習の「客観評価」と「自己評価」をテーマにした背景には、学生の資質向上のためには何が必要かということがあるが、更に言えば資質低下をどう防ぐかということでもある。保育士を目指し高い資質と目標意識を持って努力をしている学生も多くいる。しかし、まだ明確に目標を定められず方向性が定まらない状態で努力が十分でない学生に対しては、「客観評価」と「自己評価」のずれを個別に比較検討することは、自分のあり方を正確に見つめ、今後の方向を見つめる機会になるはずである。今後更に個別指導の体制を整備し粘り強く指導することが教員に求められていると考える。

参考文献

- (1) 中原大介 (2007). 児童福祉施設実習における自己評価と実習先の比較検討 大阪健康福祉短期大学紀要 第5号 111-118
- (2) 石山貴章・安部 孝 (2008). 保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題 (1) — 短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して — VISIO NO.38 157-170
- (3) 伊勢玲奈 (2015). 施設実習における学び — 実習経過にみる反省的思考 — 和洋女子大学紀要 第55集 91-97
- (4) 保育士養成課程における実習事前事後指導 — 初めての「施設実習」に向けた動機形成への取り組み — 埼玉学園大学紀要 第9号 305-311